

中国の古代住宅の展開と日本住宅との関連性に関する研究

主査 大岡敏昭^{*1}

寝殿造の祖形は中国の四合院であり、その四合院は中国古代から清代まで一貫して主流であったとするこれまでの定説に対して、中国唐代の上級住宅は四合院が主流ではなく清代よりも開放的であったが、その後清代にみられる閉鎖的な四合院に変化した。一方日本の寝殿造はそのような唐代の住宅を模倣したが、その後中世にかけてより開放化し、方位に関係なく道に面して住宅を構える正面性へと変化した、とする仮説を設定した。その仮説を実証するために唐代住宅の実態を明らかにし、併せて中国古代住宅と日本古代住宅の異なる展開を比較考察し、その文化的背景を探るものである。

キーワード：1) 道と住宅配置の関係、2) 空間の秩序性、3) 正面性と開放性、
4) 寝殿造、5) 四合院住宅、6) 唐代上級住宅、7) 儒教と仏教

STUDY ON THE DEVELOPMENT OF EARLY CHINESE RESIDENCES AND IT'S RELATION TO JAPANESE RESIDENCES

Ch. Toshiaki Ooka

In the present study, we show evidences that disprove generally accepted theory that the SINDEN-TUKURI owes its origin to the SHIGOIN of China and that the SHIGOIN has been in the main stream from the ancient China through the era of SHIN. Our findings could be summarized as follows: 1) The major style of the upper class residences in the era of TO in China was not in SHIGOIN style. 2) Residences in the era of TO were more open than that of SHIN. 3) Thereafter, it was changed to the closed style of SHIGOIN as seen in the era of SHIN.

1. 研究の仮説

現代の都市独立住宅の配置平面は、敷地の方位に関係なく、座敷と居間などの主要な部屋を押しなべて南面するという南方位重視型が一般的である。その結果、南入り以外の住宅では道との関係が非常に閉鎖化している。ところがこのような住宅は、明治以降とくに戦後に急速に一般化したものであり、現代の都市独立住宅の源流である近世の中下級武士およびそれを継承した明治以降の都市中間層の住宅においては現代住宅と大きく異なっていた。それは敷地の方位に関係なく、道に面して住宅の正面（玄関―座敷―表庭―外観正面）を向けるという正面性が主流であり、道と住宅との関係は多少の塀と門があっても道側の住宅面は広く開口し、表庭も道側に設けるといふ点でかなり開放的であった。このことは著者のこれまでの一連の全国調査で実証されている²⁾。

では、この正面性の住宅はどのような変遷を経ていつごろ成立したのかが次の重要な課題となるが、このよう

な武士住宅の書院造は平安時代の寝殿造からの変化であるからして、この問題を考える場合寝殿造まで遡る必要がある。

平安時代に成立したとされる寝殿造は、これまで中国の四合院住宅が祖形であると考えられてきた。建築史学の先学である福山敏男氏、太田静六氏、そして井上充夫氏の著作にその事が述べられている³⁾。これに対して寝殿造の祖形を内裏に求める見解もあるが⁴⁾、前者が定説であろう。ところが寝殿造はその基本形を中国の四合院住宅に真似たとされるが、その時期に相応する唐代の貴族士大夫の上級住宅の実態は何も明らかになってはいない。これまで多くの四合院住宅の調査が明治以降の先学によってなされてきたが、それは清代のものが多く、幾ら遡っても明代までであり、勿論唐代の住宅は存在しない。このような清代の四合院住宅と寝殿造を比較しつつ、清代より二千数百年前の西周時代の宮室建築遺跡の発見例をもって、それが四合院住宅と形が似ているところか

*1 熊本県立大学 教授

ら、その間にあたる唐代の空白部分も同じように四合院住宅であったとする推測を前提にしている。唐代において四合院住宅が一般化していたかについては、中国の建築史研究者たちも一様に四合院住宅であったとする見解であり⁴¹⁾、中国建築史研究の田中淡氏も唐代は四合院住宅が主流であったと述べている⁴⁵⁾。

唐代は周知の如く仏教文化の最盛期であった。その後は仏教の迫害衰退とは逆に南宋以降朱子学儒教が興隆する。その間には明確な文化的断層がある。文化史及び哲学者の和辻哲郎氏は唐宋の豊麗な詩文と醇美な彫刻絵画に比べて明のものは異なり、唐宋と明清とは中国文化史上極めて大きな相違があると指摘する⁴⁶⁾。また唐代は漢代までに纏められた古典儒教が貴族士大夫たちの教養として存在し続けるが、広く民衆にまで普及した仏教は、現世を空と捉え、来世に重きをおいて無私否欲（自利）と他人への慈悲（利他）を説いた外なる思想である。これに対して儒教は、祖先祭祀を基本にすえながら父子の孝を規範とする宗族主義で現世利益の内なる思想である。いくら中国建築が古代以降連続した要素があるとはいえ、文化が異なるのに住宅全体が同じであったとは考えにくい。住宅は文化の一側面であるからである。従って清代の閉鎖的な四合院住宅と仏教文化の繁栄した唐代の住宅が同じであったとは到底思えない。

以上の問題認識から、唐代の上級住宅は四合院形式が主流ではなかったと考え、「中国唐代の上級住宅は仏教文化に反映されて開放的なものであったが、その後、幾度かの戦乱と儒教文化の伝統の復活によって清代にみられる閉鎖的な四合院住宅に展開した。一方日本は、唐代の上級住宅を模倣しつつも平安時代にかけてさらに開放化した寝殿造へと発展していった。そして中世にかけての仏教文化のさらなる興隆を背景にして道に面して住宅正面を構える正面性が築かれていった。」とする仮説を設定した。そしてその仮説を実証するために、中国唐代の上級住宅の実態とその展開を探り、寝殿造との関連性を考察することを目的としている。併せて中国古代住宅と日本の古代住宅の異なる展開を比較考察し、それを決定した文化的背景も考えたい。

2. 寝殿造と四合院住宅

寝殿造の研究の歴史は古い。江戸時代後期の沢田名垂の「家屋雑考」に始まり、村田治郎、前田松韻、稲垣栄三、川本重雄ら各氏の研究がある。とくに戦前からの長年の労作を集大成した太田静六氏の名著「寝殿造りの研究・昭和61年」の内容は精緻で膨大である。それによると、寝殿造の基本形としては正殿である南向きの寝殿を敷地の中軸線上の後方におき、その左右と後に対屋を設け、そこから南に延びる回廊の先に中島を有する南池がある。平安盛期までは図2-1にみるように左右対称であ

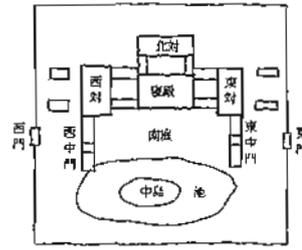


図2-1 初期寝殿造



図2-2 末期寝殿造

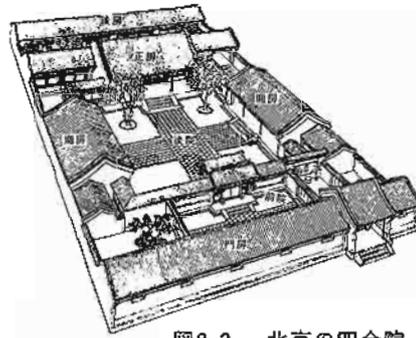


図2-3 北京の四合院（中国古代建築史より）



図2-4 寝殿造の鳥瞰
（日本住宅の歴史より）

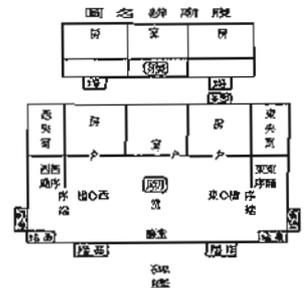


図2-5 寝殿造図（宋・揚復）

ったが、平安末期にかけて図2-2にみるように対屋が消滅あるいは対代に変化し左右非対称に変化した、と述べている。そしてこの初期寝殿造の祖形が図2-3の左右対称の四合院住宅とみなし、正房は寝殿に、東西の廂房は東と西の対屋に相当するとしている。ただ四合院住宅の廂房は正房の南側なのに対して寝殿造の対屋は寝殿の両隣にあり、両者の位置に相違がみられ、廂房を対屋の原型とみるには少し無理があると思われるが、氏によればこれは南池をとるために後ろにずらしたものと推論されている。しかし問題は唐代の上級住宅に廂房が存在し、一般化していたかどうかである。

ところで廂房といった用語は唐代においては使われていないし、正房は堂と称されていた。廂房ではなく廂という用語は古くからある。春秋時代から前漢の始めにかけて儒家たちによって編成された古典用語字書の「爾雅・釋宮」には「室有東西廂曰廟、無東西廂有室曰寢」とあり、室と東西の廂あるを廟と言い、東西の廂なく室あるを寢としている。重要なのはその廂がどの位置にあり、どのような部屋であったかである。図2-5は宋の揚復が「儀礼」を元に作成した寝殿造図⁴⁷⁾である。廟は祖先祭祀

を行い、死者の木主（位牌）を祭り、寝は燕寝であり、くつろぐ建物を意味する。図をみると、廂は中央の堂の東端と西端に位置する部屋である。東序西序とは「東西牆謂之序」とあり、東西の壁これを序と言う。即ち東西の壁に囲まれた部屋が廂である。また清代の邵晋涵の「爾雅正義」によると夾室の前に東西の廂があるとし、「礼記」の注に、「西堂は西夾の前にある」ことから廂とは堂とも言い、その位置はやはり中堂の東西端の部屋を示している。この廂は住宅から発生したものとされる。中国古代史の加藤常賢氏によれば、古くは生前の住宅がそのまま死者を埋葬する所であって廂は必要なかった。その後殷代の王が度々遷都するように旧宅を死者に与え新居を構えたが、住宅の半永久化により死者を葬する所即ち新しく廂を作るようになった、と述べている⁸⁴⁾。白川静氏は、かたしろを置く牀（台）を設け、酒をふり注いだ帯をおく、その形が寝（寝）であり、寝は祭祀空間の廂であると言う⁸⁵⁾。このように寝は住宅に始まり、廂は寝に始まり、三者は同様式の建物である。また詩人白楽天が廂山に草堂を構えた様子を詩に述べているが、その中に「五架三間新草堂（中略）来春更葺東廂屋、紙閣廂簾著孟光」とある。奥行き五架に間口三部屋の新しい草堂を建てたが、来春になったら更に東廂を作り障子を立て廂簾を垂れて老妻を置こうと思う、と言う。この東の廂とは草堂の東端の部屋を示すものと思われる。

次に廂とはどのような部屋であったか。楽天の住宅では妻の部屋であるが、廂の廂は古典文献にその記述がない。あるのは西房が夫人の部屋であり、室または堂が主人の部屋と記されている（礼記曲礼上）。廂の北の夾室は祭祀に供える食物を置く部屋であり（礼記内則）、また鶏の血祭りの部屋とされる（礼記雜記下）。廂はそれに続く南の部屋であるから、堂で行われる祭祀の予備室であったと考えられる。では、廂房なる用語はいつごろ現れるか。正殿前方の東西の建物は元代以降の「衛署州郡都省図」の中の官庁、官舎に多くみられるようになるが、しかしその名称は三房とか廊屋であり、廂房とは称していない。古図文献上に廂房の名称が出てくるのは、著者の知る限り古くは清代の「杭州府史—西湖行宮図」である。従って廂房とはそのような建物の成立以後に後世の人がつけた名称であろう。

そこで四合院という用語が誰によって定義され、いつごろから使われてきたかである。日本における中国住宅の研究は戦前にも多く行われており、明治後期以降の伊東忠太氏の膨大で精力的な調査、そして伊藤清造氏、八木装三郎氏らの調査がある⁸⁶⁾。ところがいずれも四合院という用語は使っていない。そこで中国の古代から近年までの文献を調べたがなかなか分からず、中国の建築史研究の第一人者である蕭默氏を北京に尋ねて教えを請うたところ快く協力戴いた。氏によれば、四合院という

用語は氏も中国の学者たちも慣習的に使ってきたし、これまで検討したことがないとのことであった。まず東漢の文学者であった班固の著書「西都賦（西都は漢代の長安）」に「紅塵四合、煙雲相連」とあり、その意味は、どこまでも周囲が塵土であり長安の人口が多いこと、馬車の往来が激しかったことを形容している。ここでの四合とは周囲及び四方から囲まれるという意味をもち、東西南北（或いは左右前後）の四つの方向を指すとされる。また六合という言葉もあり、それは四合に上下2つの方向を加えた意味である。唐代の詩人李白の「古風之三」には「秦王掃六合」とあり、それは秦王が天地四方を征服したとされる。このように四合、六合という用語は古代から使われている。そして四合院という用語が使われるのは1934年に出版された梁思成氏の「清式官造則例」が最初ではないかと思われる。それは四面とも建物がある一院は四合と呼び、三面のみに建物がある場合は三合と呼ぶとしている。その四方の建物は、南向きの建物を正殿あるいは正房、正殿の前方の建物は廂房あるいは配殿、正殿と向き合う建物は前殿あるいは倒座と呼ぶとしている。そしてその巻末の注釈に初めて四合院という三文字が出てくる。院という用語は内庭の意味で唐代以前から使われているからして、ここで初めて院の四周を建物が囲む住宅様式を四合院と称したのではないか。そして以降の中国研究者がそれに準じて四合院という用語を使い始め、また日本の研究者もそれを真似たのであろう。但し四合院を構成するのは居住する建物であって、門、塀、回廊は含まれないことは定義上明白である。

3. 唐代の上級住宅の実態

3.1 中国文献にみるこれまでの考え方

寝殿造の祖形が四合院住宅であると述べている先学は唐代の上級住宅を考察されてはいない。これに対して中国の建築史研究者たちは関係史料をもって唐代住宅は四合院であったとしているが、それを検討してみる。

まず唐代前の漢代である。漢代の住宅を窺い知るものは壁画、石画など割合多く発見されているし、これまでの中国文献に多く掲載されてきた。図3-1、2は身分は分からないが上層と思われる住宅である。いずれも清代の四合院住宅にみる廂房のような建物はない。塀または回廊で囲まれた住宅である。特徴としては前院後院の2つの庭があり、塀または回廊で囲まれた屋敷は2、3区画ある。それに正殿は左右対称であり、樓閣もみられる。しかし中国研究者はそれを廊院と称し⁸⁷⁾、漢代住宅を院落組織で多様な四合院であると述べているが⁸⁸⁾、それは正確な分析ではない。また図3-3の住宅も四合院としているが、正殿に向かって左右の建物は入口がないところから回廊とみられる。回廊または塀で囲まれた住宅も四合院とみなせば、日本の住宅も寺院も全て四合院と

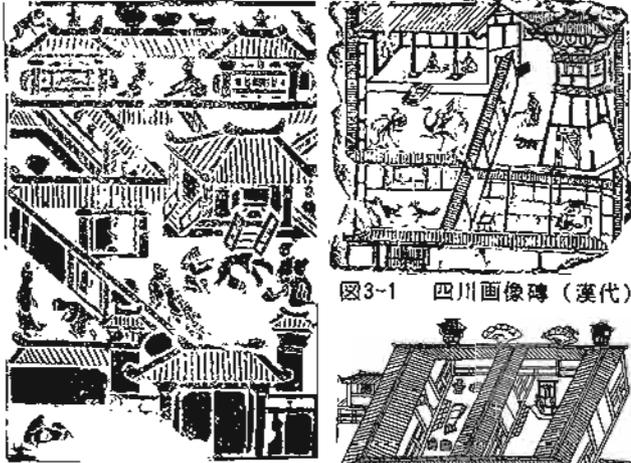


図3-1 四川画像磚（漢代）

図3-2 曲阜像石（漢代）

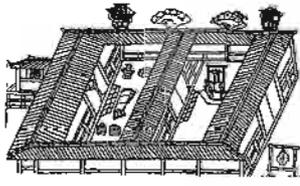


図3-3 山東画像石（漢代）

なってしまう。四合院の定義の曖昧さと言える。

次に唐代の住宅である。この時代の史料は、後に述べる敦煌壁画を除けば極めて少ない。図3-4, 5 はこれまでの中国研究者が隋唐代も四合院であったとみなす根拠の1つとしてよく示される隋代の山村住宅である。この住宅は急峻な山水溪谷を広く描いた展子虔の游春図の一隅に小さく描かれており、前図は三合院、後図は四合院として紹介されてきた¹³⁾。しかしよく見ると前図の右手建物は回廊のようにも見える。また後図の手前建物は単なる塀とみられ、四合院ではないと考えられる。図3-6 は宋代の同じような山村住宅であるが、この種の建物内部の様子がはっきりする。正殿前方の右側の建物は明らかに回廊であり、左側の建物は厩舎である。游春図の2つの住宅も恐らくこのようなものではなかったか。仮にそれらが四合院であったとしても、都市の住宅ではなく山村の小規模住宅であり、それをもって唐代の都市住宅が四合院であったとは言えない。西安郊外の中堡村の唐墓から出土した三彩建築模型¹⁴⁾も唐代が四合院であった根拠の1つとされる。しかし廂房とみなされている両側の各三棟の建物は奥行き一間で間口三間であり、その前面は丸柱のみで開放である。もしそれが廂房であるならば、堂のような入口があってもよい筈である。従って廂房とみなされている建物は回廊と考えられる。唐代の建築模型は山西省長治郊外にある王休泰墓からも発見されている¹⁵⁾。その正殿前方の両脇の建物には窓があり、廂房であったことが窺える。しかし南門は門房ではないので、これは三合院と言える。

3.2 敦煌壁画にみる唐代の上級住宅

これまでみてきたように、唐代の上級住宅を知る手掛かりは極めて少ないが、幸いにも敦煌莫高窟（千仏洞）の壁画には唐代およびその前後の時代の住宅が描かれている。周知のごとく敦煌壁画の内容は仏教の故事を主要な題材として描かれており、建築画は寺院、住宅、宮室

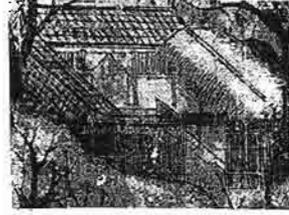


図3-4 游春図（隋代）



図3-5 游春図（隋代）

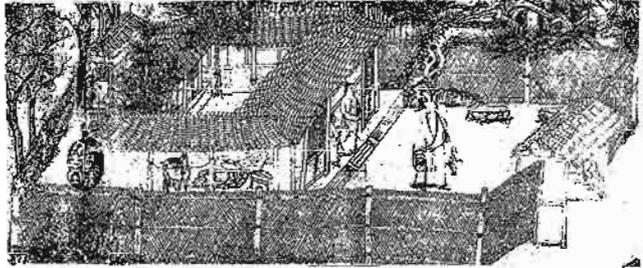


図3-6 赤壁図（宋代）

など多彩である。建築史の立場からそれを調査し、系統的に分析したのは前述の蕭默氏が最初である¹⁶⁾。まず問題は、壁画に描かれた住宅が唐代中原の住宅様式を表すものかどうかである。敦煌は河西回廊の西端にあって西域との門戸に位置し、漢代以降の歴代中原王朝にとっての政治、軍事、経済、文化の重要拠点であった¹⁷⁾。北魏以降敦煌でも漢化政策が進み、とくに盛唐にかけては、漢人の移住、長安の僧と敦煌の僧の頻繁な行き来が行われていた¹⁸⁾。敦煌の莫高窟は前凉代に数人の敦煌僧によってその造営が始まったが、敦煌の歴代支配者の支援のもとで唐代には最盛期を迎え、その後元代まで開窟が続いた。窟内の塑像と壁画は唐代にかけて次第に西域風から唐風に変化している。それは簡単素朴なものから具体的で豊富美麗なものへの変化、そして西域風の袖の短いものから唐風の袖の長いものへの服装の変化に表れている。つまり唐代以降の敦煌壁画は中原文化が強く反映しており、そこに描かれた住宅も中原の様式に繋がる。また描かれている建築の内容はそれを知らねば単なる想像だけでは描き得ない極めて写実的で詳細なものである。壁画を描いた画工は敦煌県下から集められたからして¹⁹⁾、中原の建築内容を知る造営僧の指示のもとに制作されたと考えられる。壁画の住宅はかなり多くあるが、住宅の全体が分かるものを取り上げて述べる。

図3-7 は隋代の壁画である。これは法華経譬喻品の火宅の説話に基づいて富裕な人々の大住宅が大火になった場合の悟りを説いたものである。塀が折れ曲がって描かれているが、それは大火の騒然たる様子を描いたからであろう。東西南北の四方に門があり、堂は屋敷の中軸線上に前後二棟が設けられている。そして廂房のような建物はない。この壁画には他にも数多くの住宅が描かれているが、やはり廂房のような建物は皆無である。

図3-8 は盛唐（712～781）の壁画である。これは法華経化城喻品の教義である過去、現在、未来の3世に渡っ

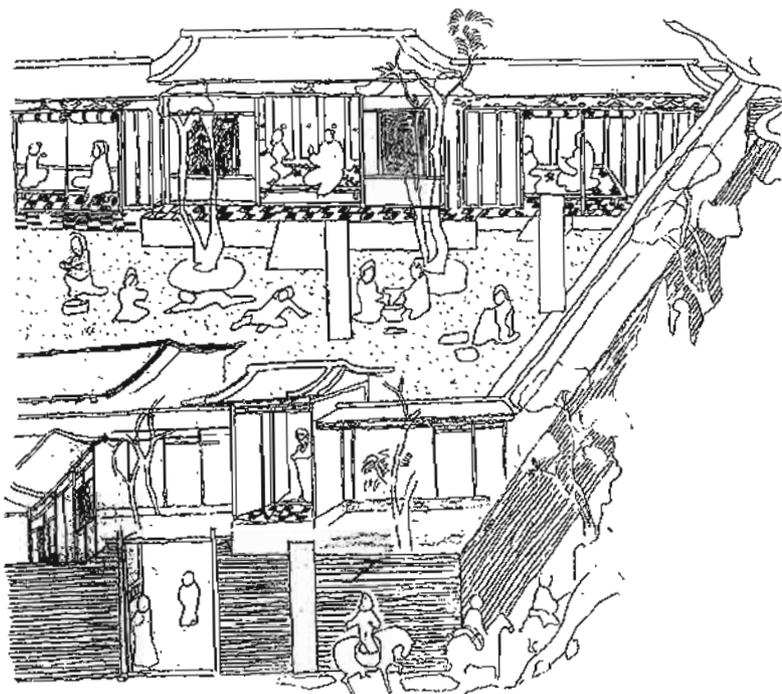


图3-8 第23窟(盛唐)·模写



图3-7 第420窟(隋)·模写

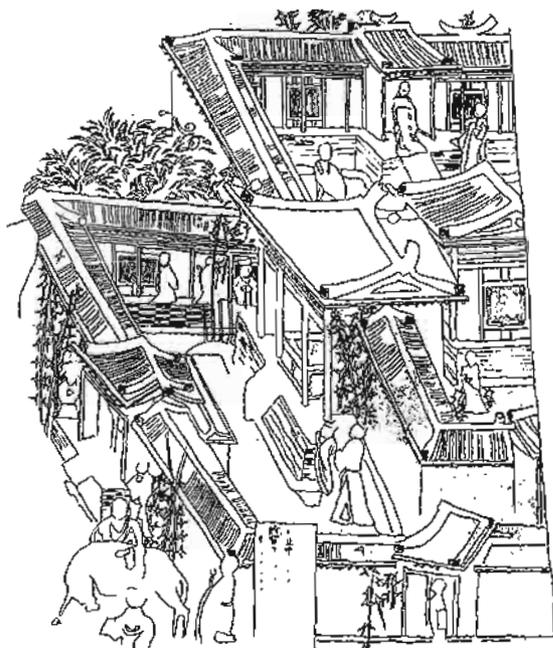


图3-9 第9窟(晚唐)·模写



图3-10 第12窟(晚唐)·模写



图3-11 第98窟(五代)·模写



图3-12 第31窟(盛唐)·模写



图3-13 第148窟(盛唐)·模写

ての悟りを説いたものであり、現在の人々の暮らしの風景を表したものと考えられる。四方を白壁の築地塀のような牆に囲まれ、その奥には瓦葺きで左右対称の堂がある。それは三棟で構成され、奥行き二間で間口が九間（九室）の建物である。三棟とも中央の部屋（これも堂という）の東西に房を設けた三間形式である。中央の棟より少し軒の下がった東西棟が前に述べた廂と考えられる。そして廂房なる建物は無い。それぞれの堂の入口には簾が巻き上げられ、部屋には花模様の筵を敷いた低い牀が置かれている。それに唐風の衣装を着た人が腰をかけたたり坐ったりしている。また中央の建物の南窓は肘掛けである。前にみた漢代と隋代の起居様式は完全なる床坐であったが、唐代では牀が持ち込まれ、床坐を主体としつつ椅子坐への若干の変化がみられる。中国の椅子坐への変化は北方騎馬民族の影響とされているが、牀は元々中国伝統の祖先祭祀におけるかたしを祭る台であるからして、それは内部変化の要素も強い。中央の建物の部屋（堂）の奥壁には掛け軸のようなものが見えるが、仏画であろう。堂の前は廊であり、床は敷瓦である。その高さは、描かれている煉瓦が5段であるから約30cm強である。南庭には東西2本の樹木があり、その庭を挟んで堂と向き合う建物が南四足門の横に見える。これは現代用語では倒座と称し、眷属が住む建物と思われる。築地塀の牆の外にさらに版土の塀がある。その間の庭は下僕たちの領域と考えられる。漢代の住宅画でみた前院後院の形式である。版土塀には頭無門があり、その横にも建物があるが、これは下僕たちが住む門房とみられる。

図3-9は晩唐(848~907)の壁画である。何故か住宅の前方だけを描いている。この住宅も前院と後院に分かれ中門の奥には倒座のような建物がある。院には竹が生い茂り、院を囲むのは連子窓がある回廊である。そして東西の建物は門であり、廂房ではない。前院は東門のほうへと広がっているが、これは現代用語における偏院である。漢代の住宅画にも数区画の院があったが、その一形態である。

図3-10は晩唐、図3-11は五代のものである。この形態の住宅は法華経変相図として晩唐から五代にかけての壁画に数多く描かれている。図3-11の壁画は法華経信解品の長者と家出をした子との関係を描いたものであるから、これは長者の住宅である。図3-10は一院の住宅である。堂は間口三間であり、その四周には連子窓のある回廊が描かれている。図3-11は前院後院の二院形式あり、院の四周は前図と同様に連子窓のある回廊である。やはりこれらの住宅にも廂房なる建物は無い。中門は楼になっている。南側偏院の左は廨舎であり、右側の作業場に円形の構造物が描かれているが、それは下僕の住居(草庐)であろう。円形の壑穴住居を窺わせる。

さらに宮室に近い上級住宅も数多く描かれているが、

その一例が盛唐の図3-12である。宮室に近い住宅になると、正殿は大殿と称していたようである^(註20)。その大殿である中央の建物の両側に妻側を南に向けて奥に長い配殿が描かれている。その配殿と中央大殿との間は回廊で結ばれている。このような建物は寺院建築にも多くみられ、蕭黙氏はこれを一殿二樓式と称している。図3-13にみる盛唐の壁画には、このような住宅が庭と門を含めて描かれている。東西と南に門があり、院は回廊に囲まれている。そして院の中央に楼のある大殿があり、その左右に楼閣風の配殿がある。配殿は妻側二間桁行き三間で、ともに大殿側に広く開口し妻側を南に向けている。一殿二樓式は漢代の住宅にも多くみられ、漢代から唐代にかけての一部上級住宅の主流であったことが窺える。このことから太田静六氏の言う寢殿側に開口し妻側を南に向けた左右の対屋を有する寢殿造はこの住宅に最も近い。ところで平城京における貴族住宅についてはこれまで多くの発掘調査が行われてきた^(註21)。その住宅は板塀の中に主屋と数棟の付属舎が様々に配置され、まだ一つの様式を持つには至っていない。だが天皇に近い上級貴族であった藤原仲麻呂の田村第は「東西に楼を構えて高く内裏に望み南面の門を便ち櫓とせり」という記述が続日本紀にある。それが実際に記したのであれば、前述した唐代の一殿二樓式の住宅と繋がるのである。

以上、敦煌壁画にみる唐代の上級住宅は廂房がなく、四合院形式ではない。またそれは大邸宅を凝縮して描かれているが、その描写は極めて写実的であり、廂房なる建物を省略したものとは考えられない。ここに示した住宅は壁画の一部に過ぎないが、公開されている壁画全ての住宅画にも廂房のような建物はなかった。

3.3 白楽天(居易)の詩にみる唐代の上級住宅

唐代の上級住宅の様子はその時代の詩文と小説からも窺い知れる。白楽天(771~846)は唐代を代表する詩人である。科挙を合格し、高級官僚の大夫まで昇りつめたが、地方の非門閥出身ゆえか官僚臭さは微塵もなく、淡々と世の中の移り変わりを見続けた。儒教は勿論、道教、仏教にも広く精通し、禪を愛した特異な詩人である。その詩は住宅に関連する内容が豊富であり、とくに長安、洛陽の住宅風景を歌ったものが多い。そこから唐代の上級住宅の実態を探ってみよう^(註22)。

3.3.1 長安の大邸宅

楽天は刺史として地方に出向いてはまた長安に戻るという生活を繰り返している。大邸宅の様子を述べたものに傷宅という詩がある。「誰家起甲第、朱門大道邊、豊屋中櫛比、高牆外廻還、累累六七堂、棟宇相連延」、誰の家かは知らないが、なかなか立派な甲第(邸宅)を建てたものである、朱塗りの門が大きな通りに面して建っている、その内側の豊屋(大きな家屋の堂)が櫛の齒の

ように沢山並んでいる、その周囲には高い牆（塀）がある、堂の建物は六七棟を数え、その棟は相重なり連なってみえる、とある。朱塗りの門が大きくそびえ、素泥（白壁）の築地塀が道にそって長く続く住宅風景を窺わせる。それは平安京の風景にも繋がる。さらに邸内には樓閣と池もあった。兩朱閣という詩には「兩朱閣、南北相對起、借問何人家、貞元雙帝子、五雲飄飄飛上天（中略）第宅亭臺不將去、化為佛寺在人間、粧閣妓樓何寂、柳似舞腰池似鏡」、二棟の朱塗りの樓閣が南と北に相對して聳えているが、何人の家かと問えば徳宗皇帝の二人の姫の住まいであったが、この二人の姫は五色の雲に乗って天に上られた、しかし第宅や亭臺は持ち去ることは出来ないで今は寺となっている、その粧閣（化粧室）や妓樓（妓女の館）はひっそりとし、庭前の柳に当日の舞腰を想い池の水を見て明鏡を想う、とある。貴族の邸宅を寺院に喜捨することはすでに北魏から行われているが、唐代の長安においても貴族住宅の多くが喜捨されていた。小野勝年氏は途中で廢寺になったものを含めて長安の市街には161の寺院があったが、その半数程度が貴族住宅の喜捨であったことを明らかにしている⁽²²⁾。これらの寺院と邸宅の規模はどの程度であったか。長安の大街（幅約77～147m）に囲まれた坊（里）の大きさは、道を除いて東西350歩（514.5m）～650歩（955.5m）、南北325歩（477.8m）～550歩（808.5m）である⁽²⁴⁾。例えば邸宅の多い東街の東市の西隣に位置する平康坊は東西650歩、南北325歩である。それらの坊が巷あるいは街という道路で十字形に4等分され、その1つが角、隅と称していた。唐会要50巻に「平康坊、七寶七載、永穆公主出家捨宅置觀、其地西北隅」とあり、西北隅という表示が喜捨した邸宅の位置を示している。また坊内三絶と称して、大街から直接出入りできたのは三品以上の高級身分だけであった。このことから三品以上の高級貴族の宅地の大きさは横幅約470m縦幅約230mの広大なものであった。これは平安京の高級貴族が占めた1町宅地よりもかなり広い。中国の考古学者の馬得志氏は西安市街の発掘調査から4分の1坊の角は十字形の道によってさらに4等分していたことを明らかにしている⁽²⁵⁾。四品以下の貴族士大夫の邸宅は大街に門を設けられないから16分の1程度の広さであったかも知れない。それでも道を除いて横巾約230m、縦巾約110mの広さである。そのような広さの寺と邸宅を除いた一隅に、曲という細街路が縦横に走り、そこに庶民住宅と邸店（商店）がひしめきあっていたことが窺える。

3.3.2 長安の自宅

長安で借家を転々としていた樂天は、その後江州、忠州への転勤を重ね、50歳になって4度長安に戻り、長安東端の新昌里に自宅（中古住宅）を構えた。身分は正五品上である。その住宅の様子は竹窓という詩に述べてい

る。「今春二月初、卜居在新昌、未暇作廡庫、且先營一堂、開窓不糊紙、種竹不依行、意取北簷下、窓與竹相當、透屋聲淅淅、逼人色蒼蒼」、今年2月の始めに新昌里に落ちついた、まだ廡や車庫を作らないうちにまず一堂を建て（古い堂の前方とみられる）、窓には紙を貼らず竹を植え、軒の下で窓と竹を相當のようにした、もって風の声を聞くこともでき、竹の色も見るができる、と言う。そして「獨此竹窓下、朝迴解衣裳、輕紗一幅巾、小簾六尺牀（中略）清風北窓臥、可以傲義皇」、朝廷から退けてくるとまず竹窓の下で衣裳を脱ぎ、薄絹の頭巾をかぶって竹で編んだ簾を敷いた牀に横たわる、清風の吹く北窓の下に横たわれれば何にも変え難い幸せである、と言う。堂には北窓もあり、低い牀はその北窓の下に置かれている。清代の四合院住宅にみる炕は南窓面にあるから、寝台の位置は北から南に変化したことになる。また前述した大邸宅ではその牆（塀）が高いことを述べているが、彼の自宅については、題新居寄元八という詩に「青龍岡北近西邊、移入新居便泰然（中略）階墀寬窄縱容足、牆壁高低粗及肩」、青龍岡の北の西によった新居に落ちついて初めて安泰を得た、庭の広さは僅かに足を容れるに足り、牆（塀）の高さは肩までしかない、と言う。そして新昌新居書事四十韻という詩に「舊屋且扶頰、簷漏移傾瓦、梁欹換蠹椽（略）巷狹開容駕、墻低疊過肩、堂室可鋪筵」、倒れかかった古家を扶け起こし、傾いた瓦を移して雨漏りを防ぎ、蟲の食った垂木を取り替える、そして巷は狭いのでそれを広げて馬車が通れるようにし、土塀も低すぎるのでそれに土盛りして肩よりは高くなるようにした、とある。また堂の床に筵を敷いたとあるので、これは低い牀を用いながらも床坐がまだ主体であったことを示すものであろう。

3.3.3 洛陽の自宅⁽²⁶⁾

53歳になった樂天は洛陽の履道坊に自宅を構えた。その時には正四品上に出世している。2年後蘇州、長安に転じ、3年後再び戻り、以後この自宅で75歳の生涯を終えている。最高位は太子小傅の正二品であった。

履道新居二十韻という詩に「履道坊西角、官河曲北頭、林園四隣好、風景一家秋、門閉深沈樹、池通淺沮溝、拔青松直上、鋪碧水平流（中略）移榻臨平岸、搗茶上小舟」、洛陽の履道坊の西角、官河（伊水の分流）が曲がる北角に新居を構えた、四隣の林園も美しく秋の風景を一家に集めたようである、門は常に閉じられて邸内には樹木が繁り、池は浅き流れを通じ、青い松は真っ直ぐに聳えたち、青い水は平かに流れる、搗（長いす）を移動して池の岸に臨み茶を持って小舟に乗る、と言う。林園であるからこの池は屋敷に隣接して設けられているのであろう。その邸宅全体の広さは、池上篇の詩に「地方十七畝、屋室三之一、水五之一、竹九之一」とあるから、約97m四方となる（中国の一畝は日本の一畝の5.5倍）。

洛陽の坊の規模は一樣に300歩(441m)四方であるから角の広さは約220m四方となり、前述の馬氏が指摘する16分の1の宅地が洛陽でも存在したとすれば、道を除いて約105m四方となる。楽天が入居した時は正四品であったから大街に入口は設けられないので、その宅地が角の4分の1であったとすれば、楽天の詩に示す規模とほぼ一致する。まず住宅とその生活についてみる。上記とは別の詩に「託質依高架，攢華對小堂(中略)清陰接步廊」とあり、南面の堂の前庭には薔薇の花が高く咲き誇り、その周囲が步廊(回廊)であったことを窺わせる。そして「中堂不甚卑，聊堪會親族，足以貯妻兒」とあり、堂の真ん中の部屋である中堂は貧しいものではなく、親族や妻子を集め会するのに足りるとしている。また「家居雖瀟落，眷屬幸團圓」とあり、中堂は祭祀の部屋であったと同時に同居している眷属との団らんの部屋でもあった。このような住宅で楽天は、味道という詩には「焚香冥坐晚總深，七篇真誥論仙事，一卷檀經說佛心」とあり、奥深い窓の下で夜香を焚いて黙坐し、真誥や檀經を読んで仏の教えを悟ることを記している。

では、楽天の家族はどのような構成であったか。長安の自宅時代に歌った庭松という誌の中に「一家二十口，移轉就松來」とあり、その当時の家族数は20人である。そしてその構成は、晩年の詩によると「二婢扶盥櫛，雙童舁簾牀」，2人の下女に助けられて手水を使い髪をとぎ、2人の下僕に命じてたかむしろの牀をかつがせる、と言うから男女4人の召使がいたことになる。また「夫妻偕老日，甥姪聚居年」，夫妻とも息災で甥姪みな同居し、そして「嬌駁三四孫，索哺繞我傍」，あどけない三四人の孫が我をとりまいて食物をねだる、とある。従って楽天の家族は召使と子供家族および眷属家族と暮らす20人程度の三世同居であろう。中国の家族構造については清水盛光氏の優れた研究がある⁽²⁷⁾。それによると唐代の家族は1戸平均5人前後であるが、上層になると三四世の同居が一般的であり、大家族を形成していた。中には「五代同居，子孫八十一口」という巨大家族もあったという。ただし同居は士人階級に限られていたとされる。宋代になると同居がさらに奨励されるが、元明清代には逆に上層の家族形態が下層の家族形態に近づき、1戸平均の家族数は唐代と変わらないが、大家族は縮小化過程にあると述べている。そのことから楽天の家族は唐代上層階級の一般的な形態であったといえよう。そこで楽天の眷属および子供家族はどこに住んでいたか。楽天の詩からは廂房の存在を窺わせる記述がみられない。宅地の東西全幅が約100mもあるので、恐らく漢代の図と敦煌壁画でみたように、宅地を数区画にして偏院を設け、そこに彼らの住まいを構えていたものと思われる。四合院が主流となる明清代にみる廂房は、このような大家族の縮小化にともなう宅地の小規模化と明代以降にとくに

発展したとされる父祖の祖先祭祀に結集し同居する宗族主義によって、同一区画内に眷属と子供家族たちの住む建物として普及一般化していったものとみられる。

次に、池のある林園はどの位置にあり、その風景はどうであったか。第新居寄宣州崔相公と題する詩の自注に「新居南鄰即崔家池」とあり、楽天の新居の南隣は崔家の池であった。その崔相公とは元宰相であり、今は官吏として宣州に赴いている。そして「濟世料君歸未得，南園北曲謾爲隣」，君は官吏として宣州にいるから当分帰ることが出来まいが、僕の家の南園と君の留守宅の北側の池と相隣してこの度新居を構えた、と言う。このことから楽天の邸宅は南側に林園があり、そこには池と竹林があり、その南隣は北に池を構えた崔家である。つまり楽天の南の林園と崔家の北の林園は続きになっている。よって楽天の邸宅への入口は、西と北には伊水の分流があることから東入りであったと思われる。南の林園と北の住宅との間に通路があり、そこを經由して南入りしたのであろう。

楽天は荒れていたこの南池を自ら整備している。池上篇の詩に「乃作池東粟廩，乃作池北書庫，乃作池西琴樓」とあり、池の東に粳穀米を入れる穀物倉庫、北に書庫、そして西に小樓を建てている。また「始作西平橋，開蹊池路，作中高橋，通三島逕，又命樂童登中島亭，合奏霓裳散序」とあり、その小樓から平橋を中島に掛け、池を巡る道を作り、3つの中島にも橋を通し、その中島に建てた亭の中で樂童に霓裳という楽を合奏させている。小樓では、別の詩に「樓空放妓歸」とあるから、妓女たちを住まわせ、また「其奈西樓上，新秋名月何」とあり、楼の上から名月を望んでいた。罷府歸舊居という詩には「屈曲聞池沼，無非手自開」とあり、池は屈曲しているが、それは楽天自ら掘ったものである。そして春池聞汎という詩に「綠塘新水平，紅檻小舟輕」とあり、春に緑の新水を湛える池で朱塗りの欄干のある小舟を浮かべている。また晩池汎舟遇景成詠贈呂處士という詩に「岸淺橋平地面寬，飄然輕棹汎澄瀾(中略)唯憐呂叟時相伴，同把磻溪舊釣竿」とあり、池の岸浅く橋平らかに池は広い、澄んだ水の上をただよいながら舟を浮かべ、呂處士よ我に伴ってともに釣りをしようではないか、と言う。また軒下に泉水があったことも、「敝居新泉，實在宇下」の詩から読み取れる。

以上にみてきたように、池は屈曲し、3つの中島があり、それに橋がかかり、朱塗りの欄干のある舟があり、池で釣りも楽しんでいる。中島には亭があり、そこで演奏を楽しむ。そして泉水は軒下にあり、池の西には小樓がある。このような南池の風景は全て寝殿造の南池の風景に酷似する。太田静六氏は「寝殿造の研究」の中で、南池と中島の発想は浄土変相図の宝楼閣曼陀羅によるとされている。しかしそのような図を見るまでもなく、楽

天の邸宅にあった池は唐代の上級住宅にも多くあったとみられるから、それを見た入唐唐僧たちが日本に伝えたものと考えられる。但しその池は院内ではなく院外に林園として設けられていたから、寝殿造における寝殿前の南池の設置は平安貴族の発想と言えるかもしれない。

4. 古代住宅の異なる展開とその文化的背景

前章において、唐代の上級住宅は四合院形式が主流ではなかったこと、さらに清代住宅のような閉鎖的なものでなく、開放性を有していたことが明らかとなった。そして寝殿造は、四合院形式ではない一殿二楼式の唐代上

級住宅と繋がる。また唐代上級住宅が池を有し、木造建築で朱塗りの門と白壁の築地塀であったという点においても寝殿造に良く似ている。だとすれば、建物の構造と材料、住み方、起居様式は異なっても、両者はほぼ同質の住宅形式である。本章は、その後の展開が中国と日本でどのように異なったか、その文化的背景は何であったかを考察する。とくにその視点は、道と住宅配置の関係および空間の秩序性の2点である。

4.1 中国の古代住宅の展開

清代とその前後の四合院住宅については、これまで多

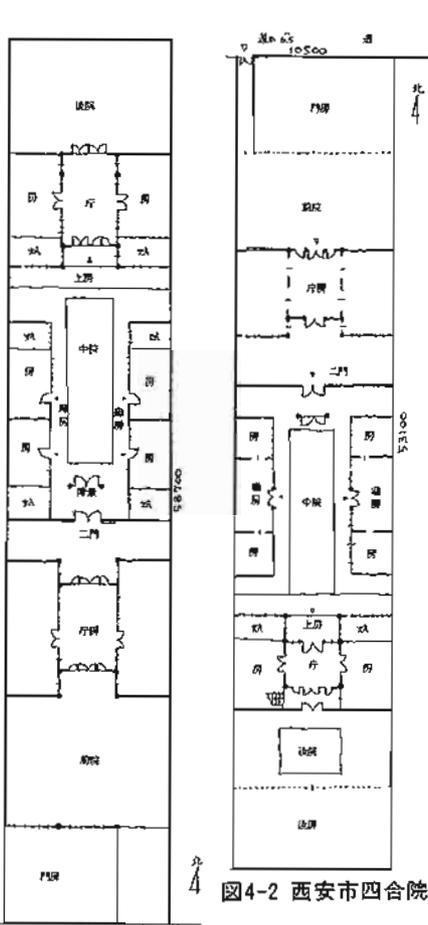


図4-2 西安市四合院住宅（北入）

図4-1 西安市四合院住宅（南入）

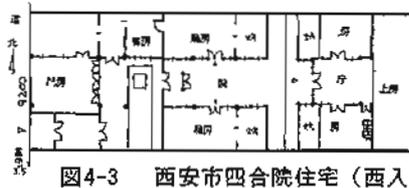


図4-3 西安市四合院住宅（西入）

（住宅地番・所有者・年代）

- 図4-1 西安市蓮湖区西羊市街121号・馬氏（清代）
- 図4-2 西安市蓮湖区西羊市街6号・馬氏（明末）
- 図4-3 西安市蓮湖区化巷街232号・安氏（清代）
- 図4-4 平遙県城内上西門南街38号・范氏（清代）
- 図4-5 平遙県城内上西門南街39号・蔚氏（清代）
- 図4-6 平遙県城内沙巷街111号・白氏（清代）
- 図4-7 平遙県城内沙巷街98号・邓氏（民国）

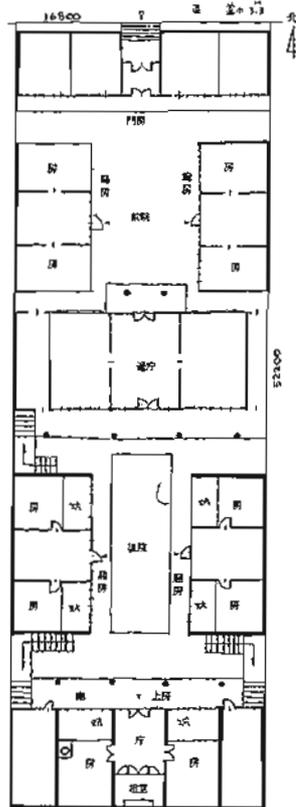


図4-4 平遙城四合院住宅（北入）

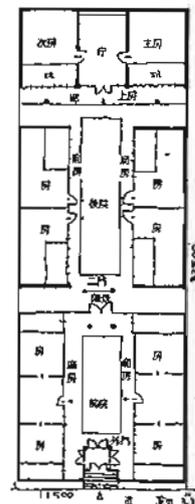


図4-5 平遙城四合院住宅（南入）

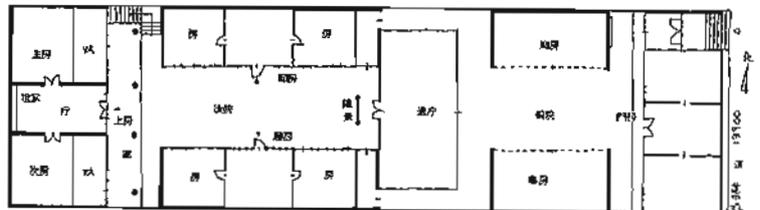


図4-6 平遙城四合院住宅（東入）

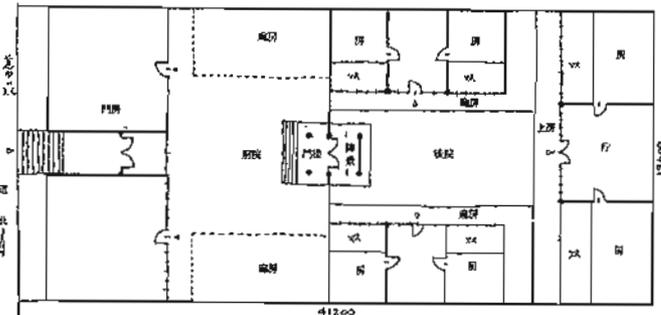


図4-7 平遙城四合院住宅（西入）



写真4-1 平遙城東西入通り



写真4-2 平遙城南北入通り

くの調査がされてきた。本研究では前述の視点から、西安市と山西省平遥城の住宅を調査した。平遥城は西周代に作られたが、明代以降のものが現存している。その典型例を図に示している。図4-1～3は回教の清真寺に近い西安市西羊市街に現存する住宅であり、明末から清代のものともみられた。図4-4～7は平遥城内に現存する住宅であり、清代から民国時代のものである。敷地間口は10m前後の狭い住宅が多い。院の左右に廂房があり、門は建物と一体になった門房であり、四合院形式である。院は奥に2～3あり、門房の奥に庁房のある住宅もある。庁房は結婚式、葬式の時の行事に使われる。しかし客の正式な接客および家にとって最も重要な祖先祭祀はさらに奥の上房の中央にある部屋（唐代では堂であったが現代では庁と呼ぶ）で行われるので、空間の秩序性からみれば奥の建物が上位となる。清代に相応する日本の近世武士および明治以降の都市中間層の独立住宅では、道側に座敷を面しており、その上位（表、晴）は道側であり、中国のそれとは全く逆である。上房中央の庁の部屋の左右には房があり、その形態は唐代でみた左右対称の三間形式を継承している。廂房もそれと全く同じ形式である。庁の奥の壁には、西安では居住者が回教徒であるのでイスラム経典に類する絵を祭っており、平遥では庁の奥に小室の祖堂を構え、そこに菩薩と土地神を祀る住宅もある。庁の源流は祭祀空間の堂と称する部屋であったから、その空間性は継承されている。また庁の左右にある2つの房は、上房に向かって右房が親夫婦の部屋であり、左房が長男夫婦または父の弟夫婦などの部屋となり、右房が上位である。これは廂房にも言え、上房に向かって右廂房が兄夫婦、左廂房が弟夫婦の部屋である。そして廂房の部屋は上房に近い方が上位となる。この右上位の秩序性は後述するが、儒教の礼に起因する。

次にこれまで四合院住宅は南向きを基本として語られてきた。しかし実際には北、西、東入りも存在するが、その違いによる住宅平面の相違は全くない。居室の上下関係をみても、南入りでは上房に向かって右房と右廂房が上位であり、それは東側となる。北入りも右側であり、それは西側となる。同じように東入りではそれが北側、



図4-8 洛中洛外図（富山・勝興寺）北⇐

西入りでは南側である。つまり東西南北の方位ではなく、上房の庁を基点としてその左右の上下関係という秩序性が尊重されている。

西安、平遥の清代住宅は柱は木材であるが外壁は煉瓦である。道に面する門と扉も唐代にみた木造の朱塗りの門と白壁の築地塀ではなく外側を煉瓦で覆っている。唐代の塀にあった窓もない。その煉瓦で覆われた門房の高さは写真4-1, 2にみるように7～8mもある。前に述べた楽天の住宅の塀は肩位までの高さであったから、その閉鎖化は極めて大である。また西安、北京の住宅も門房の軒下に小さな明かり窓があるだけで、煉瓦で覆われた門房の高さは3～4mにも達する。それに入口門の位置は中央ではなく端に寄せたものが多い。これは南東の方位を良とする風習の流行とも言われるが、道と内部を遮断しようとする閉鎖化の表れといえる。中央に門がある場合でも院内に障景という戸を設けて外からの視線を遮断しているのである。

次に重要なのは、廂房のある四合院形式がいつごろから主流になったかである。明清代は四合院が主流であったから、問題は宋元代である。その時代の史料も少ないが、宋代の文姫帰漢図²⁹¹には南門と東西門が門房に変化している様子が窺える。また元代の永楽宮の壁画²⁹²には廂房と門房の両方がはっきりと描かれている。また前述したように、元代以降の衛署州郡都省の古図には廂房のような建物が多く出現している。そのことから元代に四合院への変化が進み、明清代にかけて広く一般化したと考えられる。

4.2 日本の古代住宅の展開

左右対称の初期寝殿造は平安末期にかけて崩れていくが、西門または東門が正門となり、それに近い方をハレとし、その反対方向をケとする空間の秩序性が成立したことを川上貢氏が明らかにしている²⁹³。それを西礼、東礼と称している。それは中国住宅の秩序性が正門とは反対方向の奥が上位であるのとは大きく異なる。また寝殿造の対屋においても東西で上下の違いはないが、中国住宅においては上房に向かって右を明確に上位とするので、このことも大きな相違である。厳然たる左右の秩序性が存在する中国住宅に比べて、それにこだわらない日



図4-9 洛中洛外図（東博模本）⇨北

本住宅と言える。この西礼東礼と対称性の崩れは中世になるとさら進んでいる。それを中世京都の上級住宅の様子が描かれている洛中洛外図にみている。

よく紹介される細川邸は東正門（東入り）であるが、主殿は南向きであり、庭は主殿の南に設けられている。これは左右対称が崩れた寝殿造の継承であり、匠明の配置に類する。ところが公家住宅とみられる図4-8の住宅は北入りの北正門である。門は四足門であり、その前の建物の屋根も玄関を示す唐破風である。そして庭は道側と建物の奥側の2つがある。表庭と裏庭の成立と言える。図4-9は武士の小笠原氏の住宅であるが、これも北入りの北正門である。北側の棟門を入れて西側に道に面して庭があり、主殿の南にも庭がある。それらの主殿の正面も北側の道に向けており、北入り正面性の成立と言える。洛中洛外図にはさらに西入り正面性の住宅もみられる。このように築地塀と門の形態は寝殿造と変わらないが、建物は道側に広く開口し、それに面して表庭を広く設けるといって日本住宅の開放性の進展ともみなせよう。それは中国住宅の元代以降の閉鎖化への展開とは大きく異なる。そして近世にかけて、座敷も明確に道側に設けた正面性へと展開していったのである。

4.3 中国と日本の異なる住宅展開の文化的背景

中国住宅は左右対称を周代から清代まで継承する中で、元代以降に四合院の一般化と閉鎖化の展開にあったが、この文化的背景は何であったか。まず左右対称については、中国人の好みであるとか、或いは民族性だとする抽象的な説明が多かった。その中で伊東忠太氏は陰陽五行思想から説明されている³⁴¹。即ち「陰陽は太極を中心として左右に相対するという思想を形に表したものである」と述べている。その通りかも知れないが、しかしこれでは何のことかよく分からない。もっと具体的な生活規範があったから長い間継承されてきたと思われる。

「周礼」小宗伯の条に「建国の際に王宮の左に宗廟を建て、右に社稷を建てる」とある。その左とは東側、右とは西側を意味するが、これは廟（路寝）を出ずるときの基準に基づくものとされる。「礼記」玉藻に「君子寝るには常に東首する」とある。その理由として、鄭注に「生氣にむかうなり」とあり、生氣とは太陽が登る方位を意味する。また「礼記」喪大記第二十二に「病人を北窓の下に頭を東にして寝かせる」とある。このように東を生氣の方位とみるはやはり陰陽と関係する。「周官牧人職」の鄭注に「陽祀は天および宗廟を祭り、陰祀は地および社稷を祭る」とあり、陰陽は尊卑の区別ではなく相対関係としながら、陽の右を上位とする意味がそこにある。この左右の相対的關係と右（東）を上位とする規範は儒教經典にきめ細かく記されている。その一部をみると、「礼記」喪大記に「大夫の喪には喪主は東に座し、

主婦は西に座す」とあり、夫-主婦の關係に左右の上下關係がある。これは夫婦の居室をも規定しており、「礼記」礼器に「君は堂の東におり、夫人は西の奥の房にいる」とある。いわゆる夫婦別寝を窺わせるものである。昭和7年の南満州の住宅調査報告では³²²、東の房が主人室、西の房が主婦室であり、夫婦別寝であったことが記されている。さらに訪問客との關係においては「礼記」曲礼に「門を入ると主人は右（東）に行き、客は左（西）に行く。主人は東側の階段につき、客は西側の階段につく」とある。清代住宅の調査でも上房の片の奥に置かれた左右対称の応接椅子の坐り方もやはり右が主人で左が客であった。このように、中国住宅における左右対称は、単なる空間の形ではなく、右（東）を上位とする左右の生活規範が空間の秩序性として表れたものである。それは南入り以外の住宅においても、東西ではなく左右の規範として生きている。このことが左右対称が生まれ存在し続けた最大の理由であろう。

儒教の内なる規範は仏教文化繁栄の唐代では一部貴族士大夫の教養に止まっていた。唐武宗による廃仏と儒教側の排仏の高まり、そして仏教自らの停滞の中で南宋の朱子学が興隆した。そして古典儒教を再編成した朱子の「家礼」³³⁸が、唐代の写本から木版への印刷技術の発展と朱子の名声によって中近世社会の貴族官僚はおろか一般庶民にまで強い影響を与えた³⁴⁴。その内容は古典儒教經典の「礼記」「儀礼」「周礼」などが礼の本質と社會關係を広く論じているのに比べて、「家礼」では家の冠昏喪祭に集約簡略化し、家長と家衆の關係及び父母への忠孝が強調されている。とくに「吾が家に同居せる宗族衆多にして、冬至朔望に堂上に聚まり…」とあり、宗族主義を強調している。言わば古典儒教の内小化である。元代以降の囲みを強調する四合院の普及と閉鎖化はこの儒教文化の流れが背景にあると思われる。

一方寝殿造の左右対称の崩れとその後の日本住宅の開放性への展開の背景は何か。まず左右対称の崩れについては、これまで国風化³⁵⁵、又は純婿取から経営所婿取婚への変化³⁵⁶などで説明されてきた。しかしこの変化も方位觀念の文化が背景にあらう。儒教は飛鳥以前に日本に入っているが礼としては根づかなかつた³⁵⁷。寝殿造においても右（東）と左（西）の上下關係は存在しない。それは東礼西礼の採用、東西対屋の居住者、寝殿における客と主人との位置關係にもみられる。土俗宗教から出発した儒教³⁵⁸のもつ厳密な方位觀に比べて、同じく土俗宗教から出発した日本神道にはそれがない。死んだ人の魂は山に昇り、その山で神となる³⁵⁹。まず山が先あって特定の方位は存在しない。十万億土という遙か西の彼方に浄土があると説く浄土教は、源信によって平安貴族たちに広く浸透したが、その西方浄土觀は平安末期にかけて日本古来の神道と山岳信仰の影響を受けて

山中浄土観に変化している⁴⁰⁾。方位に関係なく近くの靈山が浄土である。また仏教の全経典には「四方仏性」とある。即ちあらゆる方位に仏がおわしますと説き、また天台は「山川草木悉皆成仏」、自然のあらゆる生きとし生けるものが成仏できると説いている。このような仏教思想が平安貴族に影響を与え、特定の方位観が生まれなかった理由であろう。従って中国の左右対称の形だけは真似ても、中身としてそれを維持する生活規範がないから崩れていくのは自明の理である。そして鎌倉仏教によってさらに仏教の自然化が進んでいる。とくに道元の禪宗は武士たちの生活思想に強い影響を与えたが⁴¹⁾、彼の「正法眼蔵」には「東西南北、いずれの方角もことごとく般若にはかならない」、また「こころとは山河大地」なりと、無我無心の教えとともに説いている⁴²⁾。これが武士の献身の思想⁴³⁾と結びつき、自然および公を尊重する考えとなり、外と内との関係においての上位（外、公→表）と下位（内、私→裏）の相対的な空間秩序が形成された。それが日本住宅における中世以降の正面性への背景になったと思われる。

5. 結論

- 1) 中国における唐代の上級住宅は四合院形式がまだ主流になっていない。四合院は元代から明清代にかけて一般化したと思われる。また唐代住宅は朱塗の門と白壁の築地塀に囲まれ、清代の住宅に比べてかなり開放的であった。
- 2) 唐代の宮室に近い上級住宅に一殿二樓式があるが、それが寝殿造と近い関係にある。また唐代の上級住宅には林園の池があるが、その内容は極めて寝殿造の南池の様子に似ている。唐代の一殿二樓式の住宅と池が統合されて寝殿造が形成されたとみられる。
- 3) 中国住宅の左右対称性は儒教の礼における右（東）上位、左（西）下位の相対的生活規範に起因する。また元代以降の廂房をもって囲みを強調した四合院住宅の普及と閉鎖化は、上層階級の大家族と宅地の縮小化のなかで、南宋の朱子家礼の普及民衆化とその内小化（宗族主義の強調と発展）が背景にある。
- 4) 日本住宅の空間秩序は中国住宅の右（東）と奥を上位とする空間秩序とは異なり、道側を上位とする外一内の秩序性にある。それは特定の方位観を持たない民俗宗教と日本仏教の影響である。そして方位に関係なく道に面して住宅を構える正面性は寝殿造における左右対称の崩れに始まり、日本仏教の自然化を背景にして中世にかけてその成立をみた。

6. 謝辞

蕭黙氏からは多大の示唆と教示を得た。また敦煌研究院の李副院長には壁画の調査に便宜を計ってを戴いた。

<注>

- 1) 大岡敏昭、都市独立住宅の配置平面原理に関する計画的的研究(1)~(7)、日本建築学会計画系論文集、No.459、489、498、508、512、517、524、1994~1999
同、日本の城下町都市における近世近代の都市住宅に関する研究(1~7)、東北支部、九州支部、2000~2002
- 2) 福山敏男、寝殿造の祖形と中国住宅月刊文化財210 1981
太田静六、寝殿造の研究、吉川弘文館、1987
井上充夫、日本建築の空間、鹿島出版、1969
- 3) 飯淵康一、寝殿造の変遷及びその要因について、古代文化39、1987
- 4) 効到平、中国民居建築簡史、1990
劉敦藻、中国住宅概説、1957
中国古代建築史、中華民国74年
- 5) 田中淡、中国建築からみた寝殿造の源流、古代文化39
- 6) 和辻哲郎、孔子、岩波文庫、1938
- 7) 欽定四書全書一経部儀礼旁通図、所収
- 8) 加藤常賢、支那古代家族制度史研究、岩波書店、1937
- 9) 白川静、文化と民俗、白川静著作集7、平凡社、2000
- 10) 伊東忠太、東洋建築の研究(上)、龍吟社、1938
伊藤清造、支那の建築、大阪屋敷書店、1929
八木英三郎、支那住宅志、瀋州文化協会、1932
- 11) 中国建築史編纂委員会、中国建築の歴史、平凡社 1881
- 12) 前掲、中国民居建築簡史
- 13) 前掲、中国建築の歴史
- 14) 西安西郊中堡村唐墓清理簡報、考古、1960-3
- 15) 山西長治唐王丘泰墓、考古、1965-8
- 16) 蕭黙、敦煌建築研究、文物出版社、1989
- 17) 復一雄、漢魏時代の敦煌、敦煌の歴史一講座敦煌学2 大東出版、1980
- 18) 土肥義和、帰義軍時代(唐後期・五代・宋初)、同上
- 19) 同上、莫高窟千仏洞と帰義軍、敦煌の歴史
- 20) 唐代の小説「周秦行紀」では、漢文帝の母の大宅の正殿を大殿と称している。
- 21) 奈良市教育委員会、平城京左京八条三坊発掘調査概報 奈良国立文化財研究所、平城京右京八条一坊十三・十四調査報告所、1989、などがある
- 22) 楽天の詩は、国訳漢文大成(白楽天詩集)を参考にした
- 23) 小野勝年、中国隋唐長安寺院史料集成、法蔵館、1989
- 24) 京大人文科学研究所編、長安と洛陽、1956
- 25) 馬徳志、唐代長安と洛陽、考古、1982-6
- 26) 洛陽の楽天の自宅について中国考古学の発掘調査が行われているが、発掘調査報告書がないのではっきりしない
王岩、洛陽唐東都履道坊白居易故居發掘簡報、考古1994-8
- 27) 清水盛光、支那家族の構造、岩波書店、1942
- 28) 中国古代建築大図典、所収
- 29) 同上
- 30) 川上貢、中世住宅の研究、墨水書房、1967
- 31) 伊東忠太、支那の建築について、日華協会、1931
- 32) 前掲、支那住宅志
- 33) 家礼は元禄期の浅見安正の和刻本を参考にした
- 34) 阿部吉雄、文公家礼について、1936
- 35) 前掲、寝殿造の研究
- 36) 吉田早苗、藤原実資と小野宮第、日本歴史350、1977
- 37) 上山春平、日本に根づかなかった礼と戒律、上山春平著作集7、法蔵館、1995
- 38) 加地伸行、沈黙の宗教一儒教、ちくま、1994
- 39) 梅原猛、日本人のあの世観、中公叢書、1989
- 40) 山折哲夫、日本人と浄土、講談社、1995
- 41) 鈴木大拙、禅と日本文化、岩波新書、1940
- 42) 玉城康四郎、道元、日本の名著7、中央公論、1983
- 43) 和辻哲郎、日本倫理思想史(上)、岩波書店、1962